

でないに花にまで届かなく採集は困難である。

次々と樹を伐採しているらしく切り倒された樹のある所にはカミキリムシ、ゾウムシ、タマムシなどが集まっており、恰好の採集場所であるが、一方ではこのような伐採が行われているということはこの付近の荒廃に一役かっているわけで非常に残念に思われる。赤西渓谷ではタマムシの新種も多く得られており、遠山雅夫氏は私にちなんでタカハシナガタマムシの記載もして頂いた。小型のハネカクシとかアリツカムシ類もかなり新種が得られているようで、次々記載が行われている。とにかくまだまだ名前がつけられていない甲虫類の出現も期待できる。

ルリボシカミキリ、クスベニカミキリ、オオトラフハナムグリ、トラハナムグリ、ムラサキツヤハナムグリなども多い。ゲンジボタル、ヒメボタル、ヘイケボタルもいる。ミズキの樹であろうかハサミツノカメムシが採集できたし、ベニツチカメムシ、アカスジキンカメムシなども得ている。

最近、坂の谷でミヤマオオハナムグリが採集されている。ただ初めに記したごとく、次々と伐採は行われており、かなり植相も変わってきているので次第に昔の姿をなくしつつあることは事実である。保護対策など立てているのかどうか、貴重な自然林であるだけに注意深く対処して貰いたいものである。

この地域の甲虫相はその一部を兵庫生物誌上に発表しているし(Vol.7, No.1, pp.39-41, 1975)、最近一応のまとめを“てんとうむし”に発表すべく原稿第一報を送っている。

○ 笠形山(神崎郡)

神戸生物クラブの昆虫指導のお手伝いをさせて貰っており、1964年その鑑定会の席上で*猪股涼一博士とお会いして笠形山のアカマダラセンチコガネ採集のニュースをお聞きして、その標本を見せて頂きたく1964年12月13日の夜、*大倉正文氏と同行、同博士宅(清荒神)にお伺いした。そこでの虫談の中で西脇にギフチョウが多いので来年ともに行きましようという話になった。当時*猪股博士によると西脇では時期が良ければ桜の花が散るようにギフチョウの群飛が見られるとのことであった。そこで1965年4月11日、西脇にギフチョウ採集となった。*猪股博士以外に西脇高校にお勤めであった岡本 清先生(東京農大卒)並びに西脇高校生数名とこちらは*大倉正文氏と私というメンバーでギフチョウを求めて出発したが、当日生憎天候が悪く途中で雨が降りだし寒く、ギフチョウどころかといった状況、河原で焚き火をする始末で散々で引き上げたがそこでアカマダラ

センチコガネがとれている笠形山を案内しようという話を持ち上がった。

1966年6月12日、はじめて岡本 清先生、*猪股涼一博士の案内で*大倉正文氏と私、それに西脇高校生の方と笠形山登山をした。日曜日のこととて登山者が結構多く、採集好地点が見つからずほぼ登山に終始してしまった。この山では岡本 清・*猪股涼一両先生によりアカマダラセンチコガネが採集されている。県下での記録はこの地以外に多可郡三国岳があるだけである。兵庫県下での記録はこれだけである。もっとよく調べて見なくてはいけない虫である。また、キベリハムシを多産することが岡本 清先生によって確かめられている。

1975年6月12日、*大倉正文、*石田 裕氏と再び出かけたが、あまり面白いものが今回も得られなかった。私はウンモンテントウを採集し、石の下からオオキイロコガネを得たぐらいであった。

1976年11月6日にはオサムシ掘りに出かけた(クロナガオサムシがいるとの情報を尾崎 勇氏より貰っていたので)。結果はクロナガオサムシは得られなかった。マヤサンオサ、オオオサ、マイマイカブリが得られたぐらいである。はじめにのべたようにこの山はもっとゆっくり調べて見なければいけないと思いつつも現在に至っている。最近山麓地あたりでは開発が進んでいて、夏のキャンプとか貸別荘のようなこともやっているようで意外とこの山もかつての虫相とは変わってきた、否変わりつつある山のようなのである。

○ 千が峰・三国岳(多可郡)並びにその近傍地域

1974年、播但基幹林道予定地域の自然環境調査が始まった。神戸大学の奥谷禎一博士から連絡があり、播但基幹林道(峰山、砥峯高原の湿原、福知渓谷、須留ヶ峰)の調査は遊磨正秀博士がされ、遊磨中部高原広域基幹林道(千が峰並びにその近傍、加美町三谷、市原及び鳥羽地域)を私が調べることになった。

この地域は播但基幹林道よりも低山であり、自然林も少ないので、もっぱら山麓地域を中心として調査を行った。特に鳥羽から三谷にかけての地域は糞虫類が豊富で、オオセンチコガネが佃煮にするくらいたくさんいたといった夢のような話が猪股博士、岡本 清先生の記に出ていた(兵庫の自然, p.81, 1960)。私が調査に向かい驚いたことは農村における牛馬の飼育がごく一部の牧場にあるだけで、機械化による農耕から一般的な家庭における牛馬の飼育はほとんど見られない状況になっていた。従って、三谷にある牧場がその中でも唯一の拠り所となった。

私はこの調査に加美町三谷地域に1974年2回、1975年9回、1976年1回の調査に出かけた。

この調査地域の一番北の地点になる三国岳(855m)でアカマダラセンチコガネが1頭採集されている。

この虫は県下で笠形山から2頭記録がある以外、全く知られていない珍品である。糞虫類は少し前まではごく普通に見られたのであろうが、私の調査に行った頃はそれほど普遍的には見られなかった。ただ三谷にある牧場ではダイコクコガネ、ゴホンダイコクコガネ、オオセンチコガネはかなりたくさん採集できた。この牧場も閉鎖されてしまったとか、現在他に牧場のようなものがあるのかどうか知らないが、糞虫類をこの地域で見るとは大変困難になってしまっているのではないだろうか。樹木類も杉の樹が多く見られるが、常緑樹などがあまり見られない淋しいもので、昆虫類にとってはあまり特色の見られない地域のように思われる(三谷の奥で杉の伐採が行われており、美しいマダクロホシタマムシが多くいたのはうれしかった)。一応、この地域の甲虫類は58科496種をまとめることが出来た。

(この地域の調査結果は奥谷禎一博士により兵庫県農林部治山課より「広域基幹林道予定地域自然環境調査報告書、1976」として発表されている)

○ 砥峯地区(神崎郡)

神崎郡大河内町犬見川揚水発電所予定地の昆虫相調査として砥峯地区、太田池地区の調査依頼を奥谷禎一博士から受けた。ダム建設のために水没する地域の大部分は杉の植林地帯で、自然植生の多いのは砥峯高原、福知溪谷にかけての地域で、そのあたりはダム建設には直接関係のない地域なので、自然破壊はある程度免れるかと思われる。

私は1977年に10回(5-9月)、愚妻と一緒に調査採集に主として砥峯を中心に出かけた。とにかく始めていく地であるから、採集ポイント探しに苦労する。川上の部落でハラグロオオテントウに出会ったのは幸運であった。とにかくびっくりするほどの個体に出会った。この種がこんなに多くいるなんて私の採集歴の中にはないことで、大変興奮した(ハラグロオオテントウのこの地での状況は次のようであった。5月14日野外ではじめて発見、5月21日交尾状態のものを多く見る。6月18日蛹が多くあるのが目につく。7月2日羽化したものが多くいる。また蛹も見受けられる。8月6日孵化直後のような柔らかな個体もいた。9月3日野外で成虫が見られなくなった。砥峯の頂上高原のススキにはクロルリトゲハ

ムシも多くいる。この種も県下でこのように多くいる所は知られていないと考える。頂上で歩行中のアキオサを得たほか、オサムシはマヤサンオサぐらいしか採れなかった。もっといっても不思議ではなかったのに。砥峯に至る途中、ルイスクビナガハムシが1頭だけだが得られた。もっといっても不思議ではない環境だが、キムネナガツツハムシも得られた。麓の方にはムツキボシハムシもとれた。チュウゴクオオネクイハムシは砥峯高原に特産しているのかと思っていたが、最近養父郡大屋町加保坂にも記録がある。砥峯高原に至る登り道は両側にそれほど樹木なども多くない道で、登るのにそれほど苦労しない。砥峯高原は雄大でハナショウブがたくさんあり、それが咲く頃(6月下旬)は実に美しい光景である。だが何分にも標高がそれほど高くない(972メートル)、樹相もそれほど豊富とまでいえない関係で、昆虫相も但馬地域などと比べるとやや少ないような印象を受ける。しかし、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、クロアゲハ、オナガアゲハ等の大型アゲハをたくさん見ることが出来る。砥峯から福知溪谷への方が面白そうに思われた。一応この度の調査で甲虫類は47科353種を記録できた(奥谷禎一、大河内町犬見川揚水発電所予定地の昆虫相。大河内地点自然環境実態調査報告書、p.42-62,1978に収録)。

○ 神戸市北区山の街、藍那地域 山の街

かつて私が日曜日毎のように採集に通っていた山の街は僅かばかりの樹木はあるが、一面田畑で池があり全くの農村地帯であった。今の山の街の様相は全く違ってしまっている。かつての面影の片鱗もなく開発がいかに恐ろしいものか、ただただ昔を知っているものは嗚然として言葉にもならない。

戦前、私の家のそばに蝶を集めている小学校の教頭先生がいた。機会がありお伺いして標本を見せて頂くことが出来た。大きな箱にギッシリとオオムラサキが詰まっていた。どこで採集になられたのかと尋ねても産地を教えてくれなかった。しつこく聞くものだからしぶしぶと山の街だと教えてくれた。

山の街の駅を下車し西へ十分足らず行くと、アベマキの相当大きなのが十数本あり、七月ともなればアベマキの梢近くを数多くのオオムラサキが強く高く旋回する。とにかく個体数の多いことは蝶仲間には知られた産地であった。

池にはタガメ、ゲンゴロウが多くいた。トンボも結構多く、この池で採集したトンボを朝比奈正二郎博士に送ったところ大変喜ばれた。クヌギの樹には

カナブン、アオカナブン、クワガタムシ科のヒラタクワガタ、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタなどがわりと多くいた。だが何といてもオオサムシである。マヤサンオオサムシ、オオオサムシはいやになるほど掘り出すことが出来た。クロナガオオサも多かった。この地のクロナガオオサムシは細身のもので、他の地方のクロナガオオサムシと若干違っている(このことは中根猛彦博士も触れられている)。私など正月の3,4日頃から雪をかきわけてオオサムシ掘りに出かけたものである。今は家が建ってしまっておサムシを探すことなど夢物語である。この地の甲虫相のまとめは残念ながら出来ていない。

藍那地域

藍那地域は木津とともに大昔の植物化石がすこぶる豊富なことで知られている。比較的開発の手が及ばないというか、わりと変化のない地域のように見える。私は家が近い関係もあるので、暇間をやりくりしては採集・調査に出かける。わりと広い地域で田畑も多くあり、それを囲んでの植物群落があったりで手が加わっていないだけに自然環境は良い。特記すべき種は見当たらないが、注目すべき甲虫は結構産する。

オオムラサキが多くいたようだが現在どうなっているか。オオオサムシがむやみと多い。特に春先など道路上を横切るのに多く出会う。勿論、ヤコンオオサムシ、マヤサンオオサムシも多い。クロナガオオサムシは数が少ない。クワガタムシ科は7種を産する。オオクワガタの記録のあるのは特記ものであるが、現在いるかどうかは疑問である。ミヤマクワガタとかノコギリクワガタ、コクワガタなどの普通種が多く見られる。美しいアオマダラタマムシ、ムツボシタマムシも得られている。ヒラズゲンセイを産するのは特筆ものである。

カミキリムシでは特に珍しいものは今のところ見られていない。ハムシ科ではキベリハムシを産する。他には一般的なハムシばかりで、特筆できるような種には出会っていない。

一応、藍那地区での甲虫は48科297種を記録できているが、まだまだ調査不十分な地ではある。(藍那地域の甲虫類は私が藍那地区自然環境調査・兵庫県自然保護協会鈴蘭台支部刊、1979においてまとめを発表している。p.26-33.)

○ 神戸市兵庫区烏原貯水池畔

烏原貯水池は私の家から約20分弱歩いた所である。貯水池周辺は私の家の庭の延長のようなもので

ある。この貯水池は周囲が約2.7キロあり、四方を緑の山に囲まれて横に細長く、広大な湖のようである。掲示によると、堰堤の長さ122.42メートル、頂幅3.64メートル、高さ33.33メートル、貯水量1,315,000立方メートル、水深15.8メートル、海拔91.2メートル、明治34年6月着工、38年5月完成したものであるとのこと。烏原村は南朝年号の正平年間と伝えられるが、烏原貯水池築造のため村は明治37年に水底に没した。中央部が水没したときの戸数98戸、建物35棟、その時の総人口は定かでない。なお付近の樹木から採れた木皮、細木、線香の原料粉(年間二千俵)は品質優秀で、全国から引き合いがあったという。現在でも減水時には水車の石ウスが見え、かつての土橋が現れる。この貯水池を取り囲む山地は水道局の所有地が多いことから開発が抑えられていて自然環境はよい。しかし、何度かの水害で山崩れがあり、地勢の変わった箇所はある。またその為の砂防工事など一部地域の変更が行われた所もある。ただ、全般的には開発のようなことが少ないだけに自然環境は良好のように思われる。

戦前は牛の放牧のようなことを目撃したことがあるが、今はそのようなことはない。池そのものは「水と森の回遊路」が出来て若干公園化するとともに、若干の規制もでき昔のような真の自然に接することの出来ない窮屈な地になってきている。

私は1935年から時間の許す限りこの地を訪れて虫の調査、採集をやっている。60年以上もこの狭い地域での調査が出来たことは大変うれしき限りである。この地は何といてもキベリハムシの多産する地であり、かつてはオオクワガタを産したり、ヒラタクワガタの大きなものが採れたりミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタなどごく普通に採集できた。また、オオムラサキを多く産する。ただ、このことは一般にはあまり知られていないと思う。蜂谷幸雄氏が調べている。乱獲されないことを切に折る。大型のシロスジカミキリも多いし、ホソカミキリなどオオサムシトラップを設置したら多く集まってきた。春にはキバネニセハムシハナカミキリがカエデの花にワンサと集まっているラミーカミキリもいやになるくらい産する。クモガタケシカミキリとかガロアケシカミキリのような小さいカミキリムシも多い。クワカミキリ、ヤハズカミキリ、ゴマダラカミキリなども普通に見られる。春先にはヘリグロベニカミキリとかベニカミキリが多かったが、最近は少なくなってきているようである。タカサゴシロカミキリも少ないが出会うことが出来る。タマムシも多い。アオマダラタマムシも稀に出会う。オオサムシで

はクロカタビロオサが山道を歩いているのに出会った。このあたりにいることは特筆ものである。オオオサムシ、マヤサンオサムシ、ヤコンオサムシ、マイマイカブリ、いずれも多い。

コガネムシ科では、アカマダラハナムグリも毎年1頭ずつくらい採集できたが、現在は出会うことがないようである。チビコエンマコガネも犬糞の多い関係から多く見られる。アオカナブンとかカナブンはかつては極めて普通に見られたが、最近はその姿に接することは少ない。カブトムシなども最近では出会うことは少ない。ヒゲコメツキも多くいる。とにかく狭い地域であるが調査回数が多い、長年月にわたっての調査になっている。従って、街の中にある僅かな自然地のような所ではあるが、私の調べただけでも驚くほどの虫の記録が出ている。メクラカメムシ科などは宮本正一博士に送ったところ名前のついていない種がかなりあった。トラップ採集をし

たら恐らく新種が出てくることは間違いないと考えている。一応、私がこの地で調べた結果では、チョウ類で8科65種、カメムシ目20科145種、コウチュウ目71科895種である(高橋寿郎、神戸市兵庫区烏原貯水池畔産チョウ・カメムシ・コウチュウ目目録。烏原貯水池自然調査書、p.1-14、神戸市土木局公園部、(財)兵庫県環境科学技術センター刊、1993)。

ただ前にも記したように、公園化したことから訪れる人が多くなり(それだけ汚れることにもなる)、若い人達による貯水池の密漁が横行している。また車の乗り入れが増加して暴走族までやってくる。何だか落ち着かない状況になってきて自然破壊が増加しており、いずれかつての自然は失われる運命にあるように思われる。

(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)

ヒメアカタテハがゼニバアオイで越冬 近藤 伸一

ヒメアカタテハがゼニバアオイを食餌植物にしているのは報告(1997)したが、冬期も幼虫が食餌植物にしているのか、またこの植物で幼虫が越冬出来るのかどうかを観察できていなかった。

今春、神戸市西区内でゼニバアオイに造られたヒメアカタテハの巣を見つけた。1株に終令幼虫1、亜終令幼虫2、中令幼虫1の計4匹、別の株に中令幼虫1を確認し、次週にも1終令1亜終令幼虫を観察した。これでヒメアカタテハの幼虫は冬期にもゼニバアオイを食餌植物として利用し、越冬していることが確認できた。

神戸市西区岩岡町(52340756) 1終令3中令幼虫
写真撮影 28-III-1999

神戸市西区岩岡町(52340756) 1終令1亜終令幼虫
写真撮影 03-IV-1999

ゼニバアオイは近年分布を広げ、西区岩岡町でも広い範囲でみられる。肥料を要求する植物なのか、畑の畦や水路の法面など畑地に近接した場所を好む。しかしこのような場所は作物の管理のため、他の雑草とともに刈られたり、除草剤を散布されたり、燃やされたりとヒメアカタテハの幼虫にとっては過酷な環境である。上記観察場所も、4月17日には除

草剤が散布されたようで、畦の植物はすべて枯れ、その後夏までゼニバアオイから幼虫の生育を観察することが出来なかった。

なお本年の春は、ヒメアカタテハの成虫及び幼虫を調査の度に観察することが出来た。調査場所は神戸市西区岩岡町A地区(52340756)、同B地区(5234-0767)、同C地区(52340766)で、観察結果は次のとおりである。また幼虫はヨモギから確認した。

11-IV-1999 B地区 1♀ヨモギに産卵

17-IV-1999 B地区 成虫2exs.

25-IV-1999 A地区 成虫2exs.

5-V-1999 B地区 成虫1ex.

9-V-1999 A地区 成虫1ex., B地区 成虫1ex., 終令幼虫1, C地区 3令幼虫1.

16-V-1999 A地区 成虫1ex., B地区 終令幼虫2, C地区 3令幼虫1.

22-V-1999 A地区 4令幼虫1., C地区 2令幼虫2, 3令幼虫2.

5月以降も調査の度に、成虫、幼虫は観察できたが、ゼニバアオイから幼虫を確認したのは9月5日で終令幼虫であった。

<参考文献>

近藤伸一(1997)ヒメアカタテハの食草ゼニバアオイ きべりはむし25(2):59

(KONDO SHINICHI 神戸市西区岩岡町619-57)